

PDF 化された社会調査実習「報告書」

名古屋市立大学人文社会学部現代社会学科の「看板講義」(私が勝手に宣伝してきた)に社会調査実習がある。何回かレポートにも書いてきたが、あるテーマで1年間近くかけて調査して、その成果を報告書にまとめるハードな講義である。

この講義が開講されたのは学部創設2年後の1998年度からである。2000年度からは印刷所で印刷・製本された報告書が刊行されるようになった。写真は退職前に撮った学科会議室に並べてある報告書である。このほかにコピー室には、報告書の在庫が保管されている。



10 数年にわたる社会調査実習報告書が、同僚の藤田さんと学科事務の小山さんのご努力により、PDF 化された。それが CD2 枚に分けて収めてあり、報

告会の写真も入っている。そこには元気な頃の石川さんの写真もあり、しばし昔を思い起こした。貴重な社会調査実習の資料を長期保存できる PDF 化してもらい、お二人には本当に感謝している。この CD は現代社会学科、私の大切な「宝」である。

実習報告書の「編集後記」は、担当教員それぞれの思いが綴られている。先に紹介した石川さん最後の「編集後記」にも、彼の思いがこめられている。

報告書 PDF 化を記念して、私の最後の「編集後記」をすこし修正して紹介しておきたい。

(2014 年 8 月 19 日)

「調査報告書」刊行によせて

今年度の調査テーマは「名古屋の防災・減災まちづくり—名古屋駅とその周辺地区を事例として」である。名古屋駅(名駅)地区にも焦点をあてた昨年度の調査を継承し、名駅周辺まで地域を広げて、防災・減災まちづくりの課題を探ることにした。

東日本大震災から3年が経過した。避難生活を余儀なくされている人がいまだ多く、復興とはほど遠い。とかく震災や原発事故の過酷な現実を忘れがちになるが、「3・11」は他人事ではない。この地域では甚大な被害をもたらす南海トラフ巨大地震が懸念されている。昨年の夏から秋にかけての台風や集中豪雨など、都市災害の危険を感じる人が多い。

名古屋の防災・減災まちづくりの対象として名駅地区を取り上げたのは、この地区が地形的にも脆弱であり、災害リスクが大きいからである。脆弱な名駅地区では、リニア中央新幹線の開通を見越して大規模な再開発が進められている。行政や企業、そして住民組織の取り組みに注目して、防災・減災まちづくりの課題を考えていきたい。

4月に山田班を編成して、港区役所と中村区役所の「事前調査」を踏まえ、調査課題と対象を設定した。名駅地区だけでなく、周辺の「日吉学区」も対象に入れることをめぐり「激論」したことが忘れられない。

名駅地区の行政や企業だけでなく、日吉学区の住民組織の活動も視野に入れることにより、調査に「厚み」のようなものが出てきた。11月のインターカレッジ報告会で名大報告と「競合」して冷や汗をかいたが、日吉学区の防災訓練などの「実践報告」では独自性がアピールできたのではないかと思う。

名古屋市の都心まちづくり課へのヒアリング後は、調査メンバー単独の活動にまかせた。私が目の手術のために入院したことなどによるが、メンバーだけで自主的に活動できる力量があり、無事にヒアリング調査が進んだ。大所帯であるメリットを活かして、昨年度を大幅に上回る15ヶ所を対象とした。

じつは入院中とその前後は心配していたが、「とり越し苦労」であったようだ。今回の調査メンバーは12人であり、昨年比で倍増した。当初は意思疎通がうまくいかか懸念していたが、それも「杞憂」であった。メンバーの個性がうまく活かされ、チームワークがよくとれていた。

人文社会学部の創設以来、社会調査実習を担当してきたが、私にとって今回の調査実習が最後である。最後にして、いちばん「まとまり」があり、印象に残る実習であった。12人の調査メンバーに感謝したい。

人文社会学部編『ESDと大学』のコラムに書いたが、社会調査実習はヒアリングなど学生が主体となって社会調査を行い、報告書にまとめるハードな作業である。社会調査や活発な議論を通じて、学生の成長ぶりを実感できるのも楽しみである。今回はとりわけ楽しく充実した調査実習を進めることができた。まさに最後を飾るにふさわしい社会調査実習であり、その成果としての報告書である。

今回も調査に協力していただいた多くの人たちに、あらためてお礼を申し上げます。

2014年2月
社会調査実習担当 山田明